

彼

芥川龍之介

青空文庫

一

僕はふと旧友だった彼のことを思い出した。彼の名前などは言わずとも好い。彼は叔父さんの家を出てから、本郷のある印刷屋の二階の六畳に間借りをしていた。階下の輪転機のまわり出す度にちようど小蒸汽の船室のようにながたがた身震いをする二階である。まだ一高の生徒だった僕は寄宿舎の晩飯をすませた後、度たびこの二階へ遊びに行った。すると彼は硝子窓の下に人一倍細い頸を曲げながら、いつもトランプの運だめしをしていた。そのまた彼の頭の上には真鍮の油壺の吊りランプが一つ、いつも円い影を落していた。……

二

彼は本郷の叔父さんの家から僕と同じ本所の第三中学校へ通っていた。彼が叔父さんの家にいたのは両親のいなかっただためである。両親のいなかっただためと云っても、母だけ

は死んではいなかったらしい。彼は父よりもこの母に、——このどこへか再縁さいえんした母に少年らしい情熱を感じていた。彼は確かある年の秋、僕の顔を見るが早いどもか、吃るどもように僕に話しかけた。

「僕はこの頃僕の妹が（妹が一人あつたことはぼんやり覚えていゝるんだがね。）縁えんづいた先を聞いて来たんだよ。今度の日曜にでも行つて見ないか？」

僕は早速彼と一しよに亀井戸かめいどに近い場末ばすえの町へ行つた。彼の妹の縁えんづいた先は存外ぞんがい見つけるのに暇ひまだらなかつた。それは床屋とこやの裏になつた棟割むねわり長屋ながやの一軒だつた。主人は近所の工場こうじょうか何かへ勤めつとに行つた留守るすだつたと見え、造作ぞうさくの悪い家の中には赤兎あかこに乳房ちぶさを含ませた細君、——彼の妹のほかに人かげはなかつた。彼の妹は妹と云つても、彼よりもずっと大人おとなじみていた。のみならず切れの長い目尻めじりのほかはほとんど彼に似ていなかった。

「その子供は今年ことし生れたの？」

「いいえ、去年。」

「結婚したのも去年だろう？」

「いいえ、一昨年おとしの三月ですよ。」

彼は何かにつつかるように一生懸命に話しかけていた。が、彼の妹は時々赤児をあやし
ながら、愛想あいその善よい応対おんたいをするだけだった。僕は番茶の渋しぶのついた五郎八茶碗ごろうはちちやわんを手にし
たまま、勝手口の外を塞ふさいだ煉瓦塀れんがべいの苔こけを眺めていた。同時にまたちぐはぐな彼等の話
にある寂しさを感じていた。

「兄にいさんはどんな人？」

「どんな人つて……やつぱり本を読むのが好きなんですよ。」

「どんな本を？」

「講談本こうだんぼんや何かですけれども。」

実際その家の窓の下には古机が一つ据えてあった。古机の上には何冊かの本も、——講
談本なども載のっていたであろう。しかし僕の記憶には生憎あいにく本のことは残っていない。た
だ僕は筆立ての中に孔雀くじゃくの羽根が二本ばかり鮮あざやかに挿さしてあったのを覚えている。

「じやまた遊びに来る。兄さんによろしく。」

彼の妹は不あ相い変か赤児あかこに乳房ちちうぶを含ませたまま、しとやかに僕等に挨拶あいさつした。

「さようですか？　では皆さんによろしく。どうもお下駄げも直たしませんで。」

僕等は今もう日の暮に近い本所の町を歩いて行つた。彼も始めて顔を合せた彼の妹の心も

ちに失望しているのに違いなかった。が、僕等は言い合せたように少しもその気もちを口にしなかった。彼は、——僕は未だに覚えていてる。彼はただ道に沿うた建仁寺垣に指を触れながら、こんなことを僕に言っただけだった。

「こうやってずんずん歩いていると、妙に指が震えるもんだね。まるでエレキでもかかって来るようだ。」

三

彼は中学を卒業してから、一高の試験を受けることにした。が、生憎落第した。彼がああの印刷屋の二階に間借りをはじめたのはそれからである。同時にまたマルクスやエングルスの本に熱中しはじめたのもそれからである。僕は勿論社会科学に何の知識も持っていないかった。が、資本だの搾取だのと云う言葉にある尊敬——と云うよりもある恐怖を感じていた。彼はその恐怖を利用し、度たび僕を論難した。ヴェルレエン、ラムボオ、ヴオドレエル、——それ等の詩人は当時の僕には偶像以上の偶像だった。が、彼はハッシツシユや鴉片の製造者にほかならなかった。

僕等の議論は今になって見ると、ほとんど議論にはならないものだった。しかし僕等は本気ほんきになって互に反駁はんぱくを加え合っていた。ただ僕等の友だちの一人、——Kと云う医科の生徒だけはいつも僕等を冷評れいひやうしていた。

「そんな議論にむきになっているよりも僕と一しよに洲崎すさきへでも来いよ。」

Kは僕等を見比べながら、にやにや笑つてこう言ったりした。僕は勿論内心では洲崎へでも何でも行きゆたかつた。けれども彼は超然ちやうぜんと（それは実際「超然」と云うほかには形容の出来ない態度だった。）ゴルデン・バットを銜くわえたまま、Kの言葉に取り合わなかつた。のみならず時々は先手せんてを打つてKの鋒ほこさき先を挫くじきなどした。

「革命とはつまり社会的なメンストラチオンと云うことだね。……」

彼は翌年の七月には岡山おかやまの六高ろくこうへ入学した。それからかれこれ半年はんとしばかりは最も彼には幸福だったのであろう。彼は絶えず手紙を書いては彼の近状を報告してよこした。（その手紙はいつも彼の読んだ社会科学の本の名を列記していた。）しかし彼のいないことは多少僕にはもの足たらなかつた。僕はKと会う度に必ず彼の噂うわさをした。Kも、——Kは彼に友情よりもほとんど科学的興味に近いある興味を感じていた。

「あいつはどう考えても、永遠に子供でいるやつだね。しかしああ云う美少年の癖に少し

もホモ・エロティツシユな気を起させないだろう。あれは一体どう云う訣かしら？」
 Kは寄宿舎の硝子窓を後ろに真面目にこんなことを尋ねたりした、敷島の煙を一つづつ器用に輪にしては吐き出しながら。

四

彼は六高へはいった後、一年とたたぬうちに病人となり、叔父さんの家へ帰るようになった。病名は確かに腎臓結核だった。僕は時々バスケットなどを持ち、彼のいる書生部屋へ見舞いに行った。彼はいつも床の上に細い膝を抱いたまま、存外快濶に話したりした。しかし僕は部屋の隅に置いた便器を眺めずにはいられなかった。それは大抵硝子の中にぎらぎらする血尿を透かしたものだだった。

「こう云う体じやもう駄目だよ。とうてい牢獄生活も出来そうもないしね。」
 彼はこう言つて苦笑するのだった。

「バクニンなどは写真で見ても、逞しい体をしているからなあ。」
 しかし彼を慰めるものはまだ全然ない訣ではなかった。それは叔父さんの娘に対する、

極めて純粋な恋愛だった。彼は彼の恋愛を僕にも一度も話したことはなかった。が、ある日の午後、——ある花曇りに曇った午後、僕は突然彼の口から彼の恋愛を打ち明けられた。突然？——いや、必ずしも突然ではなかった。僕はあらゆる青年のように彼の従妹いとこを見かけた時から何か彼の恋愛に期待を持っていたのだった。

「美代ちゃんみよは今学校の連中と小田原おだわらへ行っているんだがね、僕はこの間あいだ何気なしに美代ちゃんみよの日記を読んで見たんだ。……」

僕はこの「何気なしに」に多少の冷笑を加えたかった。が、勿論もちろん何も言わずに彼の話の先を待っていた。

「すると電車の中で知り合になった大学生のことが書いてあるんだよ。」

「それで？」

「それで僕は美代ちゃんに忠告しようかと思っているんだがね。……」

僕はとうとう口をすべにすべらし、こんな批評ひひょうを加えてしまった。

「それは矛盾むじゆんしているじゃないか？ 君は美代ちゃんを愛しても善いい、美代ちゃんは他人を愛してはならん、——そんな理窟りくつはありはしないよ。ただ君の気もちとしてならば、それはまた別問題だけれども。」

彼は明かに不快ふかいらしかった。が、僕の言葉には何も反駁はんぱくを加えなかつた。それから、——それから何を話したのであるう？ 僕はただ僕自身も不快になつたことを覚えている。それは勿論病人の彼を不快にしたことに対する不快だつた。

「じゃ僕は失敬するよ。」

「ああ、じゃ失敬。」

彼はちよつと頷うなずいた後のち、わざとらしく気軽につけ加えた。

「何か本を貸してくれないか？ 今度君が来る時で善いいから。」

「どんな本を？」

「天才の伝記か何かが善いい。」

「じゃジャン・クリストフを持つて来ようか？」

「ああ、何でも旺盛おうせいな本が善いい。」

僕は詮あきらめに近い心を持ち、弥生町やよいちようの寄宿舎へ歸つて来た。窓硝子ガラスの破れた自習室には生憎あいにく誰も居合せなかつた。僕は薄暗い電燈の下したに独逸ドイツ文法を復習した。しかしどうも失恋した彼に、——たとい失恋したにもせよ、とにかく叔父さんの娘のある彼に羨望せんぼうを感じてならなかつた。

五

彼はかれこれ半年はんとしの後のち、ある海岸へ転地することになった。それは転地とは云うものの、大抵は病院に暮らすものだった。僕は学校の冬休みを利用し、はるばる彼を尋ねて行った。彼の病室は日当りの悪い、透すき間風まかぜの通る二階だった。彼はベッドに腰かけたまま、不あいか相わら変らず元気に笑いなどした。が、文芸や社会科学のことはほとんど一ひと言も話さなかつた。

「僕はあるの棕櫚しゆろの木を見る度に妙に同情したくなるんだがね。そら、あの上の葉っぱが動いているだろう。——」

棕櫚しゆろの木はつい硝子窓ガラスの外に木末こすえの葉を吹かせていた。その葉はまた全体も揺ゆらぎながら、細こまかに裂さけた葉の先々をほとんど神経的に震ふるわせていた。それは実際近代的なものの哀れを帯びたものに違いなかつた。が、僕はこの病室にたった一人している彼のことを考え、出来るだけ陽気に返事をした。

「動いているね。何をくよくよ海への棕櫚はさ。……」

「それから？」

「それでもうおしまいだよ。」

「何だつまらない。」

僕はこう云う対話の中にうちにだんだん息苦しさを感じ出した。

「ジャン・クリストフは読んだかい？」

「ああ、少し読んだけれども、……」

「読みつづける気にはならなかったの？」

「どうもあれはおうせい旺盛すぎてね。」

僕はもう一度一生懸命に沈み勝ちな話を引き戻した。

「この間あいだKが見舞いに来たってね。」

「ああ、日帰りですべて来たよ。生体解剖の話や何かして行ったつげ。」

「不愉快なやつだね。」

「どうして？」

「どうしてつてこともないけれども、……」

僕等は夕飯をすませた後、ちょうど風の落ちたのを幸い、海岸へ散歩に出かけること

にした。太陽はとうに沈んでいた。しかしまだあたりは明るかった。僕等は低い松の生え
た砂丘の斜面に腰をおろし、海雀の二三羽飛んでいるのを見ながら、いろいろのこ
とを話し合つた。

「この砂はこんなに冷たいだろう。けれどもずっと手を入れて見給え。」

僕は彼の言葉の通り、弘法麦の枯れ枯れになつた砂の中へ片手を差しこんで見た。す
るとそこには太陽の熱がまだかすかに残つていた。

「うん、ちよつと気味が悪いね。夜になつてもやつぱり温いかしら。」

「何、すぐに冷たくなつてしまふ。」

僕はなぜかはつきりとこう云う對話を覚えている。それから僕等の半町ほど向うに黒ぐ
ろと和んでいた太平洋も……

六

彼の死んだ知らせを聞いたのはちようど翌年の旧正月だった。何でも後に聞いた話によれば病院の医者や看護婦たちは旧正月を祝うために夜更けまで歌留多会をつづけていた。

彼はその騒さわぎに眠いられないのを怒いかり、ベッドの上に横たわったまま、おお声に彼等を叱しかりつけた、と同時に大啗だいか血けつをし、すぐに死んだとか云うことだった。僕は黒い梓わくのついた一枚の葉書を眺めた時、悲しさよりもむしろはかなさを感じた。

「なおまた故人の所持したる書籍は遺骸と共に焼き棄て候えども、万一貴下より御貸ごたいよ与の書籍もその中うちにまじり居り候節せつは不あしからず悪おゆる御赦おゆるし下され度候なをうらう。」

これはその葉書の隅に肉筆で書いてある文句だった。僕はこう云う文句を読み、何冊かの本が焰ほのおになつて立ち昇る有様を想像した。勿論それ等の本の中にはいつか僕が彼に貸したジャン・クリストフの第一巻もまじっているのに違いなかつた。この事實は当時の感傷的な僕には妙に象しやう徴ちゆうらしい氣のするものだった。

それから五六日たつた後のち、僕は偶然落ち合つたKと彼のことを話し合つた。Kは不あいか相かわ変ら冷然れいぜんとしていたのみならず、巻煙草くわんえんそうを銜くわえたまま、こんなことを僕に尋ねたりした。

「Xは女を知つていたかしら？」

「さあ、どうだか……」

Kは僕を疑うようにじつと僕の顔を眺めていた。

「まあ、それはどうでも好いい。……しかしXが死んで見ると、何か君は勝利者らしい心も

ちも起つて来はしないか？」

僕はちよつと^{しゅんじゅん}逡巡した。するとKは打ち切るように彼自身の問題に返事をした。

「少くとも僕はそんな気がするね。」

僕はそれ以来Kに会うことに多少の不安を感じるようになった。

(大正十五年十一月十三日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

彼

芥川龍之介

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>